# JCLA

日本比較文学会東京支部

# 研究報告

No.16 － 2019

# 目　次

## 研究論文

■　莫言『転生夢現』に見る魔術的リアリズムの中国的諸相

小泉 泉 …… 2

## 研究余滴

■　ポール・クローデル生誕 150 年記念　――大使と渋沢栄一、稲畑勝太郎――

井戸 桂子 …… 13

## 記録

■　東京支部 2018 年研究発表の記録

…… 20

●　執筆者一覧

…… 23

●　編集後記

…… 24

●　投稿規定・執筆要領

…… 25

# 莫言『転生夢現』に見る
# 魔術的リアリズムの中国的諸相

小泉 泉

## １．はじめに

中国の作家莫言（1955- ）は、2012 年、中国で高行健に次いで二人目となるノーベル文学賞を受賞した。受賞理由としては、「幻想的リアリズムと、民話、歴史、現代を融合した」と発表されており[1]、政治的圧力や風潮に強く影響を受けてきた中国文学と、莫言自身に国際的な名声を与えることとなった。近年では、中国内外において、莫言とその作品についての多くの論評が出され、莫言は、1980 年代以降の、いわゆる「現代中国作家」として、「ロマン主義」「新感覚派」「アヴァンギャルド派」「ルーツ文学」「新歴史主義」などと多様に分類されてきた。中でも、莫言文学において、中国的「魔術的リアリズム」という論評は代表的なものであり、彼の作品をラテンアメリカの魔術的リアリズムの理念に照らすことは、莫言文学の真髄を明確にすることとなる。本稿では、莫言の『転生夢現』（2008）（原題『生死疲勞』2006）について、ガブリエル・ガルシア＝マルケス（Gabriel García Márquez, 1927-2014）の『百年の孤独』[2]（*Cien años de soledad*, 1967）と、アレホ・カルペンティエル（Alejo Carpentier, 1904-1980）の『この世の王国』[3]（*El reino de este mundo*, 1949）を参照しながら、魔術的リアリズムを産み出す作品の特徴的な要素として、ポスト植民地的背景、死（亡霊）、語りの手法、土着性について検証するとともに、『転生夢現』の歴史的背景と文体的な特徴に着目することにより、中国における魔術的リアリズムの一発展を考察する。なお、本研究は、フランコ・モレッティが「世界文学に関する推論」（2000）の中で提唱した、「世界文学システム」における「遠読」（distant reading）による研究方法を採用するものである[4]。

---

1 The Nobel Prize Organization, “The Nobel Prize in Literature 2012.” www.nobelprize.org/prizes/literature/2012/summary/.

2 ガブリエル・ガルシア＝マルケス『百年の孤独』鼓直訳（新潮社、2006）。

3 アレホ・カルペンティエル『この世の王国』木村榮一、平田渡訳（水声社、1992）。

4 Franco Moretti, “Conjectures on World Literature,“ *New Left Review* 1 (Jan-Feb 2000),

## ２．作品の背景−「驚異的現実」論とポスト植民地主義

キューバの作家アレホ・カルペンティエルが、1943 年にハイチを訪問し、その際にうけた衝撃を「驚異的現実」（*lo real maravilloso*/ the marvelous real）論として『この世の王国』の「序文」に記したことはよく知られている。カルペンティエルは、この論において、「ハイチ各地で行なわれている魔術や中央高原に通じる赤い街道で耳にした魔術的な忠告、あるいはペトロ太鼓やラダー太鼓の音、そうしたものを見聞きしてわたしはこれこそが驚異的な現実だと思った」と記している[5]。『この世の王国』は、カルペンティエルが、この観点に基づいて、ハイチ独立、すなわち、黒人奴隷の西欧支配からの独立、反乱の「驚異的」歴史を記そうとしたものである。したがって、『この世の王国』では、ヴードゥー信仰に基づくハイチ社会を背景として、語り手である黒人奴隷の視点から、いわば西欧的合理的な視点とは異なるラテンアメリカの土着文化における新たな世界観が提示されている。フランス植民地であったハイチにおける革命と、樹立された黒人政権による圧政を背景として、『この世の王国』は、寺尾隆吉によると、「驚異」を用いて「西欧への文化的従属を打破する可能性を模索した」作品であり[6]、『この世の王国』において、西欧支配に対する政治的・対抗的視点、その価値観との衝突、非合理的視点の表出がなされたこと、言いかえれば、土着の「驚異」と政治が一種の「歴史小説」として結びついたことが、のちの魔術的リアリズム作品の手法における土壌を築いたといってよい。

この点において、アマリル・チャナディ（Amaryll Chanady）は、ラテンアメリカの西欧支配（モデル）に対する拒絶的な立場を、魔術的リアリズム文学における政治的なポスト植民地的側面として説明している[7]。魔術的リアリズムは、デイヴィッド・ロ

---

56. これにより、使用する中国語、スペイン語の原書、またその他の中国語原文資料についても、一部を除き、日本語および英語訳を使用している。

[5] カルペンティエル 9 頁。

[6] 寺尾隆吉『魔術的リアリズム−20 世紀のラテンアメリカ小説』（水声社、2012）61 頁。

[7] Amaryll Chanady, “The Territorialization of the Imaginary in Latin America: Self-Affirmation and Resistance to Metropolitan Paradigms,” *Magical Realism: Theory, History, Community* (Durham: Duke UP, 1995), 125-144. 魔術的リアリズムのポスト植民地主義論については、他に、同書 *Magical Realism* に掲載されている Stephen Slemon, “Magic Realism as Postcolonial Discourse” (407-426) などがある。

ッジ（David Lodge）の言葉を借りるなら、「大きな歴史的動乱と個人的にも悲痛な変動を生き抜いてきて、その体験を平穏なリアリズムでは適切に表現することができない」と感じられる人々の経験から生じたものであり[8]、すなわち、ガルシア＝マルケスが言うように、「自然を変える能力」[9]と現実を「拡大して」（outsized reality）[10]みる必要性から生まれたものといえる。

莫言の『転生夢現』[11]は、1950 年から文化大革命を経て 2000 年までの中国五十年間の歴史の変動を背景として書かれた作品である。「莫言」というペンネームは、文字通り、「言う莫れ」を意味し、当時の圧政的な中国の政治体制をほのめかす。『転生夢現』に描かれた五十年間は、中国近代史においても中国文学史上においても、大きな転換期であり、莫言によれば、この時代の作家たちは、文学作品による政治的「奉仕」を辞めて創作の自由を獲得し、「タブーを一つ一つ突破し、心のうちに積もり積もった怨念を晴らすと共に、人民の心の声を代表する」作品を書くようになったという。さらに、この時代に経験された「戦争、驚くべき暴力、恐るべき飢餓、狂気スレスレの国民的宗教的熱狂」は、現代作家の魂に影響を与え、中国現代文学の個性として、文学作品の中で繰り返し記されてきた事柄だとも述べている[12]。『転生夢現』は、この時代、1960 年代初頭に幼少期を過ごした莫言の人生における中国農村社会の現実を露わにした作品といえる。特に、1966 年から 76 年に至る文化大革命期の「狂気スレスレの国民的宗教的熱狂」は、『この世の王国』においてヴードゥー教を信仰する黒人奴隷たちと、「驚異的」な行動を引き起こす彼らの世界観を彷彿させるものである。作品の中で、文化大革命中に西門屯大隊革命委員会主任となった金竜は、生産大隊本部の壁や窓ばかりか、頑なに個人農家を貫く養父藍瞼の顔までも革命のシンンボルである赤いペンキで塗りつぶす。「緑の炎を吹き出しそうなその両目」と「変態ぶりと残忍さ」[13]で、藍瞼からそのわずかな土地を奪い取ろうと、（生みの親である）西門牛の肉を焼き殺そうとする金竜の姿は、この時代の宗教的な熱狂を象徴的に示すもので

---

8 David Lodge. *The Art of Fiction* (New York: Viking. 1992), 114.

9 Gabriel García Márquez, “Blacaman the Good, Vendor of Miracles,” *Leaf Storm and Other Stories* (New York: Harper & Row, 1972), 117.

10 Gabriel García Márquez, “Nobel Lecture 1982: The Solitude of Latin America,” *Dictionary of Literary Biography, Year Book: 1982* (Detroit: Bruccoli Clark/Gale, 1983), 5

11 莫言『転生夢現』上・下、吉田富夫訳（中央公論新社、2008）。

12 莫言『莫言の思想と文学－世界と語る講演集』林敏潔編、藤井省三ほか訳（東方書店、2015）111-112 頁。

13 莫言『転生夢現』（上）219, 303 頁。

ある。金竜を通して、一つの世界観を共有するイデオロギー的な思想団体の狂気が、ヴードゥー教に基づくハイチの黒人たちの抵抗さながらに描かれている。

また、『転生夢現』において、この文化大革命で毛沢東を信奉する生産大隊と、個人農家に固執し続ける一農民藍瞼との対立は、『百年の孤独』において、コロンビアの内戦を背景とする、外国支配と文明化に対する土着のコミュニティの抵抗に匹敵するものである。マコンドに電気、電話、鉄道が敷設されるように、転生豚の豚舎には電気が通じ、「現代化の春風が『文化大革命』の東風とともに西門屯に吹き込」まれ、やがては（監視設備として）テレビモニターシステムが現れる[14]。『百年の孤独』では、寺尾が指摘しているように、マコンドの住民にとって重要であったのは、保守党対自由党の政治闘争よりはむしろ、マコンドという自らの共同体を外界から守ることであったが[15]、文明化とともにマコンドは崩壊の道を辿ることとなる。『転生夢現』では、革命後の農村改革は、「全面請け負い制」となり、藍瞼は、近代化の波にのまれることなく、唯一の個人経営農家として偏狭な世界観を守り通す。莫言において、非暴力的な抵抗を固辞する個の強さが、中国動乱期の驚異的現実を一層際立たせているといえる。

## 3. 死–亡霊・循環する時

魔術的リアリズムにおける死の描き方は、この様式の重要な特色を示す要素の一つである。ルイス・パーキンソン・ザモラ（Louis Parkinson Zamora）は、文学上の亡霊を考察する中で、亡霊は、魔術的リアリズムを文学上の様式として定義する上で決定的な要素として用いられていると指摘し、魔術的リアリズムの最も基本的な概念、「理解可能な事柄の本質と限界」を前景化する役割を果たすものだと述べている。

> 亡霊は、魔術的リアリストの根本的な感覚を具体的に示すものである。それは、現実とは、常に、私たちが描写し、理解し、証明できる能力を超えているという感覚であり、また、この超越的な現実に携わらせ、私たちが直感的につかんでいるかもしれないが、決して十分には把握することができない現実を引き受けることが、文学の役割であるいう認識である。魔術的リアリストのテクストは、私たちに、理解可能な領域の限界を超えて見る目を要求するが、亡霊は、しばしば私

---

14 莫言『転生夢現』（上）340-341 頁。

15 寺尾 109 頁。

たちの案内人となる[16]。

したがって、魔術的リアリズムにおける亡霊は、ザモラも指摘するように、直線的な歴史的記述における物語の基盤を揺るがすものである。『百年の孤独』に現れる亡霊は、野谷文昭が、ガルシア＝マルケスにおいて、生と死が同じ重さで描かれている点を指摘しているように[17]、生と死（現在と過去）の一体化、混在を示す時間的概念、記憶、歴史的概念との関連において論じられてきた。またザモラは、ガルシア＝マルケスの小説に関して、「歴史それ自体が、対立し、清められ、使われ、克服される亡霊である」と述べ[18]、循環的な時間性を示唆している。

『転生夢現』では、魔術的リアリズムのこのような亡霊の特性が、西欧の価値観と対置的な文化思想の中で生かされている。莫言は、ノーベル文学賞受賞講演や「紅楼夢賞」受賞の記念講演の中で、『転生夢現』の執筆にあたり、作品の題名と構造様式を、ある廟で「六道輪廻」の壁画を見たときに思いついたことを明らかにしている。また、作品の創作真意について、次のように述べている。

> この作品の真の意図は、六道輪廻を時として捉えることです。輪廻転生において、長い時間の流れの中で生死に直面することで、人は、次から次へと機会を与えられます。それぞれの人が生死の試練を経験するたびに、その人の社会や人生に対する見方に大きな変化が生じるのです[19]。

『転生夢現』では、この六道輪廻の思想が、語り手の転生と試練を通して具象化され、円環的な時の中で、生と死が繰り返されていく。チーイン・アリス・ウォン（Chi-ying Alice Wang）は、莫言の宗教的概念の使用と超自然的モチーフの使用について、それが教訓的な教義ではなく中国社会に浸透している仏教の風習であって、読者と共有する宗教上の信念を利用することで、現世的な語りの世界観に広がりを生み出している

---

16 Lois Parkinson Zamora, “Magical Romance/Magical Realism: Ghosts in U.S. and Latin American Fiction,” *Magical Realism: Theory, History, Community* (Durham: Duke UP, 1995), 497-498. 日本語は引用者訳。

17 野谷文昭「余韻と匂い」『新潮』第 111 巻 7 号（2014）178 頁。

18 Zamora 503.

19 熊志琴編『論莫言《生死疲勞》』（香港浸會大學文學院、2010）74 頁。日本語は引用者訳。

と述べている[20]。したがって、西門鬧の転生は、民間の人々の間に浸透している超自然的ともいえるイデオロギー的概念を保持しながら、「現実的領域を拡大」し、絶え間なく「現実に由来」する文学を追求し続けようとする莫言の創作理念を示すものといえる[21]。

それゆえに、『転生夢現』に描かれた中国五十年間の現世においては、試練を乗り越えることで思想的に安寧な救いが得られることはない。冤罪によって「閻魔大王」に銃殺されて始まる西門鬧の六度の転生（ロバ、牛、豚、犬、猿、大頭の赤ん坊）は、抑圧的な中国の政治体制をほのめかし、西門鬧の死に際も、飢民に襲われ、拷問にかけられ、溺死するなど、壮絶な運命を免れない。さらに、2000 年の幕開けと同時に起こる最後の転生において、西門鬧はようやく人間の姿に生まれ変わるにもかかわらず、不治の病である血友病に冒された大頭の赤ん坊として誕生する。「ミレニアムの落とし子」[22]として人間に再帰する西門鬧、藍千歳の誕生は、『百年の孤独』の結末で、豚のしっぽを持って生まれた赤ん坊が、蜃気楼の町マコンドの消滅を予期するものであったのと同じように、救済よりはむしろ、再び襲われる苦難を予期するものと考えられる。抜群の記憶力と天才的な言語能力を持って産まれながら、転生動物として偏境な農村社会に生きる人々の変遷を語っていく藍千歳の語りは、物語の構造そのものに示されている通り、再び動乱の始まりに戻ることになる。西門鬧の繰り返される生涯は、夢とも現実ともつかない「驚異的現実」と地獄を輪転するという、文字通りの「拷問」にさらされることを通して、動乱の中国の現実社会の仕組みを象徴的に暴いたものといえる。

## 4. 語り−あてにならない語り手

このような物語展開を「魔術的リアリズム的」に仕立てているのは、西門鬧の語りそのものである。寺尾は、『百年の孤独』における最大の特徴として、歪曲した視点を作り上げ、これを共有する共同体によって自立した小説世界を作り上げたことを挙

---

20 Chi-ying Alice Wang, “Mo Yan’s *The Garlic Ballads* and *Life and Death Are Wearing Me Out* in the Context of Religious and Chinese Literary Conventions,” *Mo Yan in Context: Nobel Laureate and Global Storyteller* (Indiana: Purdue UP, 2014), 124, 133.

21 莫言『莫言の文学とその精神－中国と語る講演集』林敏潔編、藤井省三ほか訳（東方書店、2016）389 頁。

22 莫言『転生夢現』（下）419 頁。

げ、これを「魔術的リアリズムの二本柱」として指摘している[23]。カルペンティエルの『この世の王国』においても、黒人奴隷の英雄マッカンダルの変身は、黒人奴隷たちの間に作り上げられた一つの現実の世界観の中で信じられている。『転生夢現』では、語り手西門鬧の転生は、『この世の王国』における指導者マッカンダルやティ・ノエルの変身を想起させるものであり、彼らの変身能力を真っ向から信じている黒人奴隷たち同様に、合理的・西欧的な世界観による視点が排された語り手自身の思想感を窺わせるものである。また、もう一人の語り手、藍解放による語りも、「超自然的」世界観を逸した視点で描かれている。

> 西門牛よ。やつ[金竜]があんたに加えた暴行を事細かに話す気にはとてもなれぬ。あんたは牛に転生してのち、はや四度も転生しており、陰陽界を行き来するなかで、細かなことはもはや忘れておろう。だが、あの日の光景はおれの心に焼き付いて忘れられないのだ[24]。

『転生夢現』の語りの内部では、いわゆる「非現実的」と見られる出来事が多く起こるわけではない。むしろ、この作品において強調される驚異性は、「屈強さ、肉体的苦痛に耐える能力、死すとも屈せぬ精神」にあるといえる[25]。寺尾は、カルペンティエル、アストゥリアス、ルルフォ、ガルシア＝マルケスに至る魔術的リアリズム作家に共通する基本作法について、「彼らが小説作品の中に描き出す事件は、すべて『語り』の中で作り出されたフィクション」である、すなわち、「現実そのものを複写して社会的事象を忠実に再現するのではなく、小説の虚構性を前提に、架空の物語に説得力を与えるためにリアリズムを用いる」のだと述べているが[26]、『転生夢現』の語りにおいても、この魔術的リアリズムの創作理念におけるリアリズム性を共有しているようにみえる。もっとも、この点において、橋本陽介は、中国における魔術的リアリズムについて、それが誤った定義の下で紹介されたとし、ラテンアメリカで完成した魔術的リアリズムが、驚異的な現実を日常性の中でごく普通の出来事として提示するものであるのに対し、中国における魔術的リアリズムは、現実を幻想的なものに変え、誇張的な手法によって過剰に仕立て上げるものとして、『百年の孤独』とは、逆向きの処理

---

23 寺尾 104-105 頁。

24 莫言『転生夢現』（上）303-304 頁。

25 莫言『転生夢現』（上）302 頁。

26 寺尾 83-85 頁。

が行われていると指摘している[27]。しかし、『転生夢現』において、いわば、あてにならない語り手としての西門鬧が、非合理的な視点から「架空の物語」を生み出す上で現実を用いて語っているとするならば、西門鬧の語りは、むしろ忠実に魔術的リアリズムという語り様式のエッセンスを受け継ぐものとみることができるのである。

## 5. 土着性と文体美学

このように、『転生夢現』は、中国農村社会にもたらされた五十年にわたる政治的、社会的動乱の歴史を、一地主が転生した動物の視点を通して描いた作品であるが、その土着性は、作品全体の様式と強く結びついている[28]。莫言にとって『転生夢現』を書くことは、「中国古典小説に対するリスペクト」として、「民族的伝統と民族文化からさらに小説の資源を掘り出そうということ」であり、莫言は、この作品で明・清時代に盛えた長編小説の形式の一種、章回体の方式（大きな特徴として、長編小説を章に分け、それぞれに二句のタイトルをつけるという方式）を用いることにより、「中国史上の長篇章回体小説に対する回想あるいは敬意を呼び起こそうと思った」のだという[29]。この点においても、橋本は、中国における尋根（ルーツ）文学と魔術的リアリズムとの関わりについて次のように述べている。

> 韓少功は、中国にも「根」を探す文学が登場しつつあるといい、例として賈平凹の「商州系列」や、阿城の「棋王」を挙げている。[中略] 注意しておくべきなのは、ここでいう「伝統文化」とは儒教などを中心とした「正当な」中国文化ではないということであろう。それよりも、儒教などによって覆い隠されてしまっていた、「民間」の伝統文化なのである。そして、そうした民間にあった伝統や神話、占い、奇怪な物語などを見事に描いて見せたのが『百年の孤独』をはじめとするラテンアメリカの魔術的リアリズムなのであった。尋根文学の作品と魔術的リアリズムの結びつきが強くなるのは必然的である[30]。

---

27 橋本陽介『越境する小説文体－意識の流れ、魔術的リアリズム、ブラックユーモア』（水声社、2017）181-186 頁、『ノーベル文学賞を読む－ガルシア＝マルケスからカズオ・イシグロまで』（角川選書、2018）225-238 頁。

28 ここで述べる「様式」とは、後述する鍋島論に基づく。

29 莫言『莫言の文学とその精神』370 頁。

30 橋本『越境する小説文体』239-40 頁。

まず第一に、ウォンも指摘するように、とりわけ、個人農家を守り通し、一畝六分の土地で生き抜く藍瞼に象徴的に見られる人と土地との強固な結びつきは、『転生夢現』における主要なテーマの一つであり[31]、作品の根幹を貫く要といってもよい。藍瞼の生涯は、半身を雪に覆われているところを西門鬧に拾われることに始まり、自ら墓穴に入ることにより閉じられる。その墓碑に刻まれる碑文－「土からきたすべては土に返そう」[32]－は、その土地を離れることなく「自らの見識を堅持し、社会全体を敵に回しても恐れず、最後は命がけで自らの尊厳を守り抜いた」[33]一人の農民の姿を肯定的に示すものである。初期中国文化において、人と大地は、神聖なつながりをもつものとされているが[34]、大地に根付く藍瞼の尊厳は、金竜の行為から浮かび上がる冷酷な人物像と対照的に示されている。

また、作品の背景に描かれる自然風土は、『転生夢現』の土着的なエネルギーを生み出す点で欠かすことのできない要素、モチーフとなっている。殊に、月は、作品を通して「月下の不思議」[35]を見守る存在として、広大な中国大陸とその歴史を映し出している。

> 流れを下るわしらを迎えたのは旧暦八月十六日の月だったが、あんたたちの結婚した夜のそれとはまったく違っていた。[中略] 甘く憂わしげだったあの夜の月は、もっぱらあんたたちの婚礼のためにやって来たのだったが、悲壮にして寂しげなこの夜の月はもっぱら逝った毛沢東のためにやって来たのだ。わしらには月に乗った毛沢東が見えた－肥った躰のせいで月はひしゃげていた－赤旗を羽織って、指にはタバコを夾んでいる。仰向け加減にした重そうな頭、物思う顔の表情[36]。

作品に一貫して描かれる月や杏の木による文体の効果について、鍋島能弘の文体美学という観点を援用するならば、これらの描写は、作品に神秘的な雰囲気を生み出しているとともに、作者莫言の土着に根付いた、かつ芸術的な美意識を反映するもので

---

31 Wang 134.

32 莫言『転生夢現』（下）383 頁。

33 莫言『莫言の文学とその精神』391 頁。

34 Wang 134.

35 莫言『転生夢現』（下）33 頁。

36 莫言『転生夢現』（下）88 頁。

ある。鍋島は、文体と美意識の関係について、「文体の本質は人格（personality）にあるし、美意識の本質も人格に存するのであるから、人格という基底に基づいて、いや、人格を公分母として、文体と美意識は合致することになる」と述べ、作家の内的生活や生活体験、人格的経験と表現（文体）との関わり、すなわち、「美的に統一されていなければならない」人格、独創性（あるいは創造性）、表現の三つの形式的、内容的要素の緊密な関係性における「様式」について論じている[37]。莫言が、1955 年中国の田舎町、山東省高密県に生まれ、飢餓と孤独の中で幼少期を過ごしてきたことはよく知られているが、この時期の体験について、莫言は、飢餓は、彼を「命をめぐりことのほか深い体験を有する作家」に仕立て、飢餓と孤独は、彼の豊かな想像力を養うこととなった「創作の宝もの」であると独白している。幼少期に学校をやめていた莫言が、野原で牛の世話をしながら最初に覚えたことは、白昼夢に耽ることであり、彼が青少年期を、祖父母などから「不思議で恐ろしい」多くの物語を聞いて過ごしたことも、彼の無限の想像力の広がりに拍車をかけたといえる[38]。したがって、莫言の作品における表現は、橋本が言うように、「大げさ」「グロテスク」にみえる部分がある一方で[39]、「制約の中において、充分な美的価値を発揮」し「最大の独創性は最大の制約の下に発揮される」[40]という鍋島の述べる逆説の下に、土着性を美的に高めたものといえる。『転生夢現』に使用されている月と杏の木のようなモチーフは、土着の風土に根付いた莫言文学が示す、すなわち、人と大地の結びつきが美的に昇華された、ラテンアメリカ魔術的リアリズムの発展的変容の一側面を象徴的に示すものである。

## ６．おわりに

莫言は、「ノーベル文学賞受賞講演」(2012 年) や他の講演の中で、彼の一連の作品の舞台となる「高密東北郷」創設の過程において、ウィリアム・フォークナーやガルシア＝マルケスの影響を受けたことを認め、「彼ら[外国作家]が現実を観察する方法および彼らの人生に対する、世界に対する見方を理解した」と述べている[41]。その上で、『転生夢現』を特に「中国的」に仕上げた要因の第一に挙げられるのは、言うまで

---

37 鍋島能弘「文体美学について－序説」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第 11 号（1958）143-144, 147, 159-160 頁。

38 莫言『莫言の思想と文学』50, 53-54, 73 頁。

39 橋本『越境する小説文体』191 頁。

40 鍋島 151 頁。

41 莫言『莫言の思想と文学』221, 59 頁。

もなく、文化大革命を中心とした中国史上の動乱期における「驚異的現実」であり、これを土着の人々の視線から描き出したことである。莫言は、張清華による新歴史主義に関する論文（1998）の中で、『転生夢現』以前に出版された『豊乳肥臀』（1995）において、すでに、「一冊の近現代史を一家庭の成員たちの経歴や運命に還元あるいは縮小し、歴史を民間に還元し、純粋な民間的観点から民間の人生を描き、彼らの近世の多くの重大歴史事件における運命」を描いたことで評価されている[42]。しかし、『転生夢現』では、この土着的な民間の対抗的なエネルギーを、莫言自身の言葉で、「優美なる言語の助け」[43]を借りることで、独自の魔術的リアリズムに発展させたということができる。莫言は、中国五十年の動乱の歴史を背景に「ユーモラスかつ生き生きとした筆遣いで」[44]自身が体験した「驚異」を描くと同時に、その驚異的な歴史の中で生きること、（死さえ）繰り返す苦難を、ユーモアを持って、すなわち、魔術的リアリズムという様式を用いて、和らげているようにもみえる。根本的には、魔術的リアリズムの第一歩を踏み出したカルペンティエルらラテンアメリカ作家たちが共有していた「現実を直接的に小説創作と結び付けようとする無垢な心」を[45]、莫言もまた共有していたと考えられる。しかし、ラテンアメリカの作家たちが、新たな文学世界の開拓に、自ら真新しい手法を見出そうとしたのに対し、莫言は、中国古典文学の伝統を引き出し、風土と伝統を美的に融合させた現代における土着的文学「様式」を生み出した。この点に、魔術的リアリズムの中国的な特異性を見出すことができるのである。

最後に、莫言の魔術的リアリズム文学における「無垢な心」の共有は、彼が各国で行った数々の講演の中で言及してきたゲーテの「世界文学」に対する理解ー「文化を跨がる対話と交流」[46]ーに通じるものである。莫言が、こうした「世界文学」を視野に入れて創作を続けてきたことは、今後の魔術的リアリズム文学の真の「世界文学」としての発展への展望を予期させるものに他ならない。

---

42 莫言『莫言の文学とその精神』8 頁。

43 莫言『莫言の思想と文学』78 頁。

44 莫言『転生夢現』（上）223 頁。

45 寺尾 32 頁。

46 莫言『莫言の思想と文学』210 頁。

# クローデル大使と渋沢栄一、稲畑勝太郎

ポール・クローデル生誕 150 年

井戸桂子

2018 年はポール・クローデル生誕 150 年にあたった。2016 年 4 月、中條忍氏、根岸徹郎氏、大出敦氏が中心となって、ポール・クローデル生誕 150 年記念企画委員会が立ち上げられ、ローラン・ピック駐日フランス大使と芳賀徹氏を名誉委員長に迎えた。2018 年一年を通して、多くの企画を実施し、成功裡に終了した。筆者は実行委員として参画したが、その記念事業をここに記させて頂く。

その前に、クローデルが日本に残した二つの具体的な業績―日仏会館と関西日仏学館（現アンスティチュ・フランセ関西）―を支えた人物について述べたい。渋沢栄一と稲畑勝太郎である。クローデルは彼らと年齢をこえて交流した。ことにクローデルの日記から見える彼らへの想いを探りたい。

## １．大使として赴任するまで

ポール・クローデルは、1868 年（明治元）年 8 月 6 日に、フランス、パリの北東 100 キロの小さな村に生まれた。村のはずれの丘に登ると、西の方角にウルク谷、パリに向かう切通があった。その広大な谷と夕日を眺めると、パリから、海へ、未来へとつながる。姉のカミーユを通じて知ることになる日本も、彼方である。

この 1868 年、28 歳の渋沢栄一は、前年から徳川昭武と共にヨーロッパに滞在していた。パリ万国博覧会を訪問した後、引き続き、幕府代表として欧州各国を歴訪していたのである。しかし、1868（慶応 4）年 1 月に将軍・慶喜が大政奉還を行ったので、秋にマルセイユを出航、帰国した。

1862（文久 2）年、京都の菓子舗亀屋正重に生まれた稲畑勝太郎は、6 歳で 1868 年の明治を迎えた。1870（明治 3）年、粟田小学校に入学し、頭角を現し、15 歳で京都府から初の公式派遣で渡仏。リヨンで合成染料や染色の技術を学ぶこととなる。なお、稲畑のフランス語は、1891（明治 24）年ロシア皇太子が京都来遊した折に通訳を務めたほどの巧みさであった。

このように、渋沢栄一はクローデルより 28 歳、稲畑勝太郎は 6 歳年長である。

クローデルは 1898（明治 31）年 30 歳で初めて念願の日本旅行を果たした。そのと

き渋沢はすでに 58 歳、貴族院議員をつとめ、財界の指導者だけでなく、教育機関設立と社会貢献に尽力していた。稲畑は 36 歳、輸入染料店の他、苦労の末、大阪豊崎村に日本初の毛斯綸（もすりん）紡織会社を開業したところだった。しかし、休暇で来日した在中国フランス副領事クローデルが二人と出会うことは、残念ながらない。

1921（大正 10）年 11 月 19 日、53 歳のクローデルは大使として日本に赴任する。81 歳の渋沢は子爵、59 歳の稲畑は大阪商工会議所会頭となっている。

## ２．渋沢栄一と

フランス文化の施設を東京に設けるという発想は、クローデルの二代前のルニョー大使時代からあった。その後、日仏協会終身会員の渋沢の賛同を得たものの、実現には至っていなかった。

双方の期待感の高まる中、クローデル新大使は、12 月の日仏協会主催の歓迎会でフランス会館設立に触れるが、具体的動きは 1923（大正 12）年 1 月、渋沢と大使館で 1 時間半にわたり話し合い、構想を交換してからである。4 月に加藤友三郎首相が官邸で渋沢の説明を聴く会を催し、5 月にはクローデルが大使館に関係者を午餐会に招いた。9 月の関東大震災を乗り越え、12 月に渋沢を代表とする日仏会館創立委員会が組織され、翌 1924（大正 13）年 3 月に法人許可がおりると、理事長となった渋沢は計画を進め、12 月の開館記念式典に至る。またクローデル自身も渋沢の推挙で名誉理事長となる。クローデルは懸案の計画を実現させた。

また、この日仏会館設立だけでなく、経済ミッションの面でもクローデルは渋沢を頼りにしたと推測できる。1924（大正 13）年秋、一大通商使節団の来日の後、「仏国通商会社」を藤山雷太と渋沢が設立したからである。

この 28 歳年長の重鎮は、クローデルの離任まで厚志を尽くした。1927（昭和 2）2 月、大正天皇ご大喪の礼を経て、クローデルがアメリカ大使に向けて離日する直前、日仏協会として送別会を催した。クローデルの日記[1]には、渋沢子爵による“Gr(and) banquet”に「150 人出席」とあり、クローデルの感動と子爵への感謝の念がよく表れている。なお、クローデルの日記に”Shibuzawa”の名があるのは、この日だけである。

また、出発の朝、渋沢は乗船のため横浜に向かう大使を東京駅のホームで見送った。渋沢 87 歳、1927（昭和 2）年 2 月 17 日、真冬のことであった。

---

[1] Paul Claudel *Journal I (1904-1932),* Introduction par François Varillon; texte établi et annoté par François Varillon et Jacques Petit, Bibliothèque de la Pléiade 205, Paris: Gallimard, 1995, p.759.

## ３．稲畑勝太郎と

稲畑勝太郎は大阪商工会議所会頭として、クローデルの前に登場した。関東大震災のあと、1923（大正 12）年 11 月にクローデルが関西視察で出張したときは、稲畑に勲章を授与し、彼の染料工場とモスリン工場を視察した。1924（大正 13）年仏領インドシナ総督メルラン来訪の折は、稲畑は一行を南禅寺脇の自分の和楽庵にて茶会でもてなした。1925（大正 14）年 1 月、休暇帰国の前の送別会では、稲畑の送辞にクローデルが応えた。なお、その時のクローデルの日記[2]には、稲畑の名前とともに、「薩摩焼の古い花瓶」と記された。夜ホテルで、花瓶をじっと手に取るクローデルが想像される。

クローデルにとって、稲畑はまさに製造業の成功者であり、文化人であった。しかし、その付き合いがさらに深まり、進化を遂げたのは、フランス休暇から戻ってきた、1926（大正 15）年の 5 月から 12 月の 7 か月間である。それは、関西に日仏学館を設立しようというゼロからの計画を、稲畑から相談されたからである。

同年 5 月 5 日夕刻、クローデルは道頓堀の料亭大和屋にて稲畑の招宴を受け、設立の構想を聞いたと思われる。この日、まず午後に文楽座で「菅原伝授手習鑑」道明寺の段を鑑賞し、宴席と道頓堀散策をはさみ、夜は中座で「仮名手本忠臣蔵」を稲畑と共に観ている[3]。公の付き合いをこえて、娘レーヌとともに、大変親密なもてなしを受けている。レーヌを交えたとても和やかな表情の写真が、文楽座と中座で撮影された。父と娘は、文楽人形そして大星由良助役の中村鴈治郎と共に、にこやかに写った。

さらに、7 月に、エリオ元首相の夫人が訪れたので、稲畑はクローデル一行を和楽庵で午餐に招き、また、琵琶湖畔の山元春挙の蘆花浅水荘に案内した。その際、山元春挙が馬の絵を描くと、その絵に、クローデルは「稲畑勝太郎へ」という為書きと短詩を墨書した。この日の出来事はクローデルにとって思い出深く、日記[4]に記された。

最後は離日直前の 1926（大正 15）年 12 月初頭、関西への旅である。大使は関西日仏文化協会で稲畑らに別れを告げた。

> 日佛間ノ友情益々親密ナル事ヲ得バ最モ幸甚トスル所ニシテ（…）私ハ日本ヲ離ルルモ私ノ事業ハ永遠ニ日本ヲ去ラヌ事ヲ思フ[5]

---

[2] *Ibid.*, p.656.

[3] *Ibid.*, p.715, p.716.

[4] *Ibid.*, p.725.　その詩とは、「山元春挙曰く　馬来たれと願えば　馬来る」である。

[5] 関西日仏文化協会　スピーチ(1926 年 12 月 6 日設立総会)　日本外務省外交史料館資料　6/1/9/36-1「外國諸館員移動報告雑纂、外交官及領事官」　中條忍『ポール・

と述べたといわれる。文字通り、クローデルの事業は永遠に日本に残る。

この関西出張は、日記[6]には大阪と京都へのAdieuの旅と書き、稲畑、山内と新しい日仏学館について話すと記した。ちなみに、クローデルは日記に稲畑の場合のように3回も固有名詞を書き残すことは少なく、影のように寄り添った山内義雄でさえ、同じく3回であった。

この日記への書き込みからも、クローデルが6歳年長の稲畑に対し、単なる財政上の支援者へのお礼という恩義をこえた、親愛と深い信頼の気持ちを抱いていたことが窺える。クローデルは関西でかけがえのない自らの理解者を得たのである。

父の世代である28歳年長の日本財界の重鎮から受けた厚情。兄のような6歳年長の関西財界代表者と交わした友情。財政援助をこえて、力強く暖かく差し伸べられた手は、クローデルの日仏交流の想いを実現し、心にも深く刻まれた。

## 【記念事業一覧】

**ポール・クローデル生誕百五十年記念　金剛永謹能の会第三十二回東京公演**
**「新作能　面影～ポール・クローデル　『女と影』による～」**
解説：中條忍
2018年2月4日（日）　国立能楽堂

**「生誕150年記念　詩人大使ポール・クローデルと日本展」**
《文学展記念イベント》
① 講演会「世界書物の系譜―繻子の靴はどこに行ったか？」
　辻原登　5月20日（日）
② 対談「詩人大使の創作を支えた山内義雄」
　山本泰朗、中條忍　5月27日（日）
③ シンポジウム「今に生きる前衛としての古典―詩人大使クローデルの句集『百扇帖』をめぐって」

---

クローデルの日本』（法政大学出版局2018）p.214.

6 *Ibid.*, p.743.

芳賀徹、夏石番矢、恩田侑布子、金子美都子　6 月 17 日（日）
④　上映会　クローデルの詩による創作能　『薔薇の名―長谷寺の牡丹』
渡邊守章　6 月 24 日（日）
⑤　ギャラリートーク「展示解説」
鎌田邦義　6 月 9 日（土）、7 月 14 日（土）
⑥　ギャラリートーク「ポール・クローデルと横浜」
根岸徹郎　7 月 8 日（日）
2018 年 5 月 19 日（土）～ 7 月 16 日（月・祝）　県立神奈川近代文学館

**ポール・クローデル生誕 150 周年記念　『繻子の靴　四日間のスペイン芝居』**
翻訳・構成・演出：渡邊守章
出演：剣幸、吉見一豊、石井英明、阿部一徳、藤田六郎兵衛、野村萬斎（映像出演）
2018 年 6 月 9 日（土）　～ 10 日（日）　静岡芸術劇場 SPAC

**ミニ・シンポジウム「クローデルと極東」**
「関西日仏学館とインドシナ」
立木康介
「ポール・クローデルとインドシナ」
ミッシェル・ワッセルマン　　コメンテーター：牧野元紀
「クローデルの中国滞在期の散文詩集『東方の認識』を通じて中国や 3 週間旅した日本の印象を紹介」
門田眞知子
2018 年 6 月 30 日（土）　京都大学人文科学研究所セミナー室

**「梅若研能会　よこはま能の会　ポール・クローデル生誕 150 年記念公演」**
解説：中條忍
2018 年 7 月 16 日（月・祝）　横浜能楽堂

**講演会・トーク**
**「クローデル『繻子の靴』講演 DVD 上映と解説」**
（ポール・クローデル生誕 150 年記念シンポジウムプレ企画）
渡邊守章
2018 年 10 月 1 日（月）　日仏会館ホール

**講演会「クローデルと中国―中国の空に輝く三つの星：**
**クローデル、セガレン、サン＝ジョン・ペルス」**
（ポール・クローデル生誕 150 年記念シンポジウムプレ企画）
恒川邦夫
2018 年 10 月 4 日（木）　日仏会館中会議室

**『百扇帖』コンサート**
（ポール・クローデル生誕 150 年記念シンポジウムプレ企画）
歌：マチルド・エチエンヌ　　エミリアーノ・ゴンザレス・トロ
2018 年 11 月 1 日（木）　日仏会館ホール

**「ポール・クローデル生誕 150 年記念シンポジウム　ポール・クローデルの日本」**
**開会の辞**　芳賀徹　ローラン・ピック
**基調講演**：「ポール・クローデルの懐深い生き方に学ぶ」
福井憲彦
**第1部**　**日本への道程**
「クローデル、マラルメ、そして日本」
渡邊守章
**第2部**　**日本を読み解く**
「ポール・クローデル　日本の旅人」
井戸桂子
「ものの『ああ性』を求めて―クローデルと日本文化」
大出敦
**第3部**　**日本の息吹**
「ある詩法の深化―3 回にわたる日本滞在を通して」
カトリーヌ・マイヨー
「劇作家クローデルと日本演劇参照―戦略的使用か」
パステル・レクロアール
「クローデルゆかりの地―日本画家山元春挙の大津別邸」
ミッシェル・ワッセルマン
**第4部**　**日本への視点**
「ポール・クローデルの日本―直感的『共同出生』とカトリック的『叙階』」
ドミニック・ミエ＝ジェラール

「日本における宣教師の庇護者　ポール・クローデル」
上杉末央
「ポール・クローデルと宗教学―西洋から日本へ」
フランソワ・ラショウ

**第5部　日仏間の橋**

「クローデルと仏領インドシナ問題」
篠永宣孝
「フランス航空軍事顧問団と日本航空産業」
クリスチャン・ポラック
「日仏文化機関の創設者ポール・クローデル」
三浦信孝

**総括**　中條忍

**『百扇帖』ビデオ上映とコンサート**

紹介：ローラン・テシュネ　ビデオ上映：アンサンブル室町
演奏：首藤匠、須賀江麻理江、堀内由紀

**閉会の辞**　坂井セシル

2018 年 11 月 3 日（土・祝）～ 4 日（日）　日仏会館ホール

**講演会「ポール・クローデルと〈象徴〉の詩的＝霊的体系：聖母マリア、教会、聖書」**

ドミニック・ミエ＝ジェラール
2018 年 11 月 5 日（月）首都大学東京（南大沢キャンパス）特別会議室

**講演会「その女の名はロジィ―ポール・クローデルの情熱と受苦―ロザリーからイゼへ、クローデルからイゼへの手紙」**

テレーズ・ムルルヴァ
2018 年 12 月 18 日（火）　日仏会館ホール

（以上）

≪記録≫

# 研究発表 2018 年

## 2018 年 1 月例会（二松学舎大学）

■短篇小説ジャンルの展開と翻訳文学
——芥川龍之介訳「春の心臓」を事例として——

東京大学（院）　中川映里

■木下杢太郎におけるコスモポリタニズム
——詩集『食後の唄』自序を読む——

清泉女子大学　有光隆司

## 2018 年 3 月例会（清泉女子大学）

■未来小説における虚構と現実の境界の揺らぎ
——ディストピア・小説・現実をめぐって——

法政大学　日中鎮朗

■メイベル・L.・トッドの見た日本　——外国人が見た「ツナミ」を中心に——

日本大学　梅本順子

## 2018 年 4 月例会（東京工業大学）

■戦前期地域社会における皇族の表象　——福島県会津地方を事例に——

日本学術振興会特別研究員　茂木謙之介

■村上春樹と翻訳

専修大学　山口政幸

## 2018 年 5 月例会（東京工業大学）

■【特別講演】　近代的『自然』概念とその定着をめぐって
——『日本人は自然を愛する民族』説の由来——

国際日本文化研究センター（名誉教授）　鈴木貞美

## 2018 年 7 月例会（清泉女子大学）

■【特別企画】カズオ・イシグロの文体

学習院大学　　眞野泰

## 2018 年 9 月例会（清泉女子大学）

■詩と絵画の交響　――『龍虎』を中心としてみた観世信光の能世界――

日本大学（非常勤）　雨宮久美

■堀口九萬一によるレミ・ド・グールモン作品の漢詩訳について

日本大学　椎名正博

## 第 56 回東京支部大会（明治大学駿河台キャンパス）

【研究発表】

■運命を照らし出す天使

――横光利一『天使』とアンドレ・ジッド『贋金つくり』――

明治大学（院）　大久保美花

■モーリス・バレスとドイツ

――モーゼル川流域の戦争モニュメントをめぐって――

お茶の水女子大学　田中琢三

■不可視なものの負荷

――横山秀夫による警察組織の表象とフランス企業小説――

尚美学園大学（研究員）　熊木淳

■イーデン・フィルポッツと江戸川乱歩　――探偵小説における〈悪〉の表象――

金城学院大学　小松史生子

■清順映画にみる戦争と「したたかな」女性たち

――田村泰次郎原作との比較を中心に――

早稲田大学（研究員）　関愛善

■莫言『転生夢現』に見るマジカル・リアリズム的展開の諸相

フェリス女学院大学　小泉 泉

【講演】

■日韓文学者会議から東アジアの未来へ

作家・法政大学教授　中沢けい

## 2018 年 11 月例会（東京大学）

■「和歌漢訳」にみる文化翻訳の諸問題について

日本大学　呉 川

## 2018 年 12 月例会（東京大学）

■特別講演

丸谷才一の遺したもの　――「文学」から「文学」を作る――

日本女子大学（名誉教授）　ソーントン不破直子

# 執筆者一覧

（掲載順、敬称略）

■　小泉 泉　フェリス女学院大学

■　井戸 桂子　駒沢女子大学

# 編集後記

《人文学の危機》が叫ばれて久しいところですが、行政面での処遇や大学の運営に関する動きは別として、現場にいるはずの私たちには、なかなかその実態は見えてきません。自然科学の場合とは異なり、人文学においては目に見える形をとった「進歩」や「ブレイクスルー」といったものも起こりにくく、研究者おのおのの内部でゆっくりとした変化が進行しているに過ぎないからでしょう。私たちはこの変化を大切にしたい、と思いますし、そのためにも研究発表の受け皿はいくらあっても多すぎる、ということはないと考えます。この点日本比較文学会東京支部の会員は環境に恵まれている、といっていいのではないでしょうか。年に８回の例会と支部大会がさらに盛況を呈することを期待する次第です。

研究成果の発表の場として、『東京支部研究報告』が発刊され、印刷冊子の体裁からご覧のようなウェブ上の刊行物として公開されるようになって、早５年になります。この間、『東京支部研究報告』の編集、刊行にご尽力くださった西村靖敬先生から、編集委員長の仕事を引き継いだところです。いまだ新米の編集委員長ですが、西村先生をはじめ、諸先生からのご指導をいただきながら、東京支部の研究レベルの向上に少しでもお役に立てるよう、努力してまいります。

今号には小泉先生から、莫言作品の「魔術的リアリズム」に関する投稿をいただきました。もともとは中南米文学において名付けられた概念が現代中国文学にどのような形で適用されるのか、大変興味深い内容です。また、井戸先生からは「研究余滴」として、日本におけるポール・クローデルの活動をおまとめいただきました。外交官にして大詩人であったクローデルの貴重な記録といえましょう。

まだまだ投稿論文が多いとはいえない現状です。今後ともとりわけ若手会員のみなさまから、例会や支部大会での研究発表をもとにした、意欲的な論文投稿をお待ちいたします。

（椎名正博）

# 電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』研究論文投稿規程

電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』（以下、「電子版『研究報告』」）は、原則として毎年一回、11 月末日に発行される。電子版『研究報告』への研究論文の投稿は、以下に定める手続きによるものとする。

## １．投稿資格

研究論文の投稿資格を有する者は、本学会員で、前年および前々年に開催された東京支部例会または東京支部大会において研究発表や講演等を行なった者とする。投稿者は、支部例会または支部大会における各自の発表をもとに、投稿論文の原稿を作成すること。

## ２．論文の字数（語数）および書式

投稿論文の字数（語数）および書式等については、別に定める「電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』研究論文執筆要領」に従うこと。

## ３．論文の提出

投稿論文の電子媒体のファイルを、8 月 16 日から 8 月 31 日までに、以下の送付先に送付すること。

送付先：日本比較文学会東京支部編集委員会委員長　椎名正博
shiina@chs.nihon-u.ac.jp

## ４．採否の決定

投稿論文の採否は、東京支部編集委員会および企画委員会が査読の上、決定する。なお、必要と認められる場合には、上記両委員会の委員でない支部会員に査読を委嘱することがある。

## ５．著作権等

投稿者は、電子版『研究報告』に掲載された研究論文の著作権を有するが、掲載が決定された時点で、日本比較文学会東京支部がワールドワイドウェブによって公衆送信することを許諾したものとする。

# 電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』研究論文執筆要領

電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』への研究論文の投稿にあたっては、以下の執筆要領に従って原稿を作成すること。

## １．使用言語

使用言語は日本語、英語またはフランス語とする。

## ２．字数（語数）

原稿は横書きとし、注等を含めて、日本語の場合は 8,000〜12,000 字とする。英語およびフランス語の場合は 3,500〜5,000 語とする。

## ３．書式

東京支部のホームページより、投稿用のテンプレート（ひな形）をダウンロードして使用し、テンプレートに記載された書式に関する留意事項を踏まえて、原稿を作成すること。

## ４．図版の使用

写真、図、画など図版を挿入することもできるが、図版が占めるスペースも、規定の字数のうちに含まれるものとする。また、図版の掲載に関する版権等の問題の解決は、すべて投稿者の責任において行なうこととし、十分に著作権法を尊重するよう注意すること。

日本比較文学会東京支部　研究報告 No. 16

発行人　佐藤宗子
発行日　2019年11月30日

編集委員会（編集担当）
委員長　椎名正博
委　員　鈴木美穂　高柳聡子　永井久美子　堀江秀史　安元隆子

事務局　〒259-1292　神奈川県平塚市北金目 4-1-1東海大学
文化社会学部　文芸創作学科
TEL：0463-58-1211
E-MAIL: hikakubungakutokyo@gmail.com